

# キケローの『老年論』(“Cato Maior De Senectute”) <sup>1)</sup> についての一考察 — 古代ローマの教育観および道徳思想を探る —

北岡 宏章

## A Study on Cicero’s “De Senectute”

### — In Search of Educational Views and Moral Ideas of Ancient Rome —

Hiroaki KITAOKA

#### I はじめに

“De Senectute” は、老年期の望ましい生き方を模索したキケロー (Marcus Tullius Cicero, 106~43A.C.) の哲学論文のひとつである。「エトナ山を背負ったような」とも形容される重苦しくも辛い老年期を、如何にすれば幸福に充実して過ごせるのかを問う二人の若者に、 齢 84 になる (10・31) 大カトー (Marcus Porcius Cato, 234~149A.C.) が助言を与える対話形式で書かれている。この書の成立事情を述べた箇所、キケローは「この書の執筆は無上の喜びで、老年のわずらわしさをことごとく拭い去ってくれたばかりか、老年を優しく喜ばしいものにしてくれた」(1・2) と述べている。自らにも迫りつつある老いを意識しながら<sup>2)</sup>、老年の諸側面を集中的かつ哲学的に考察する中で、キケロー自身にとってもあるべき老年の姿がより明確になり、自らこれを喜んで受容できるようになった。大カトーに仮託して語られる老年観は、勿論、キケロー自身のそれである。キケローの “De Senectute” は、「善き老年とは何か」の問いに答えることを直接の目的としながらも、実はそうした善き老年を迎えるために、青年期から壮年期にかけての時期をどのように生きるべきかを論じた人生論ともなっており、そこに共和政期ローマの教育観や道徳観が垣間見られる結果となっている。同書は、内容そのものの秀逸さとキケローの文体の美しさのゆえに、今日に至るまで西洋で長く読み継がれてきた作品である。英国では、パブリックスクールやグラマースクールで古典教材として広く用いられ、そうした教育機関に学んで

国の指導者層になっていった人々の思想的基盤となり、彼らの道徳観や人生観を形成するに大いに与ったと考えられる。本稿では、キケローが老年をどのように考えていたのかを分析すると共に、望ましい老年へ向けての準備を教育および道徳という観点から捉え、古代ローマの教育観・道徳観の一端を明らかにすることを目的とする。(なお、先にも触れたように、同書では主人公カトーの口を通じて著者であるキケローの思想が語られているのであるが、煩雑さを避けるため、以下本稿ではすべてカトーの思想として言及していくことにする)。

カトーは、一般に老いが疎まれる 4 つの理由を挙げ、それぞれに対し、古今の様々な思想や老いの姿を引き合いに出して反論し、老いが必ずしも不幸ではないことを、それどころか、心がけや向き合い方次第で、老年はむしろ人生の充実・完成の時期となることを論じていく。個々の議論を分析する前に、全体を貫くカトーの視座を概観することにする。

人は皆、老齢に達することを望むのだが、それが手に入ると今度は非難する (2・4)。

大変シニカルな表現である。勿論、人が望むのは、老いそのものではなく、長生きすることであるが、実際に長生きをして老年に達すると、そこまで生きられたことに感謝するどころか、自らが老いて若さを失ってしまったことを残念に思い、あれこれと不平を述べ立てる。カトーは、そのことの大きな矛盾ないしは愚を、老年を論じるに当たってまず指摘する。とはいえ、

若さを失ったことへの不満や残念な気持ちは、確かに、多くの人の感じるところである。では、どうすれば、長生きして老年に達することができたことを喜び、感謝できるのであろうか。カトーは言う、「自分で自分の中から善きものを残らず探し出す人には、自然の掟がもたらすものは、一つとして災いと見えるわけがない」(2・4)。更に言う、「自然の手で人生の他の場面が見事に脚色されているのに、最後の幕が、あたかもへぼ詩人によるかのように手抜きされていることはありそうにない」と(2・5)。つまり、自然は老年期も、他の年齢段階と同様に意義深いものとして作り上げているのであるが、たいていの人はそのことに気付かずにいる。カトーは、もし自分に智慧があるとすれば、「それは自然を至高の導き手として、神の如くに従い服しているという点である」として、最も重要なことは、自然の掟 (*naturae necessitas*) を見定め、これに服するように生きることであると論じる(2・5)。こうした言葉に、カトーの老いを捉える基本的な視座がよく示されている。要約すれば次の3点になるであろう。第1に、すべてが自然によって素晴らしく計画されているのであるから、自然による計画ないし法則としての「掟」を知り、それに従い、自然の意図を自らよく実現するように生きていくことが肝要であり、それこそが老いの充実ないし幸福につながる。とすれば、第2に、老いは単なる衰退ではなく、成熟であり完成への接近を意味することになる。老いを見る目の反転が必要である。かくして第3に、死への向き合い方も変わらねばならない。「すべてのものには終わりがある。木の実や大地の稔が成熟の後にしおれてボタリと落ちるように、賢者はそれに従容と耐えねばならない」(2・5)。老年の充実と完成の後には、必然的に人生の終局が訪れる。死を恐れ、逃れようとするのではなく、むしろ「従容として」しなやかに (*molliter*) 受け入れ、人生の舞台から淡々と去っていくのが賢明な態度であり、自然の掟に即した生き方である。

カトーはこうした老年についての大きな見方を提示した上で、自らの同年代の者達からしばしば聞かれる老年への不満を二つ取り上げ、それらを論評することで自らの立場を更に闡明する。カトーによれば、多くの同年代の仲間が老年を残念に思う主な理由は、快楽がなくなったということと、以前は常に敬意を払ってくれていた人達に老いて軽んじられるようになったと

いうことである(3・7)。カトーは、しかし、こうした不満を全く感じずに過ごしている人々が、自分も含めて多数存在することを指摘する。結局のところ、何を喜びとし快楽とするかが問題であって、老年には老年に相応しい、しかも老年になってこそ可能となる喜びや快楽がある。そうした喜びを追求し実現している老年は、若者や周囲から敬慕され続け、充実の内に老年期を全うすることができる。結局のところ、老年期に違いをもたらすのは、その人の節度や性格であり、つまるところ徳の有無である。「老年を守るのに最も相応しい武器は諸々の徳 (*virtus*) を身につけ実践することである」(3・9)。いかに年老いても、その人の最期に至るまで、徳はその人を見捨てることはない。それどころか、「人生を善く生きたという意識と、多くのことを徳によって行ったという思い出ほど喜ばしいことはない」とカトーは述べるのである。

ここからカトーは、一般に老年が厭われる4つの理由—公的な活動から疎遠になること、体力の衰え、快楽がなくなること、死の接近—を挙げ、それぞれを仔細に検討する。その際、同一人物や同一の話題—例えば、老年期を見事に生き抜いたファビウス・マキシムスの姿や、若者を指導する老年の喜び—が繰り返し語られる。そうした優れた老いの姿を4つの老いへの不満と対比して順次考察する中で、カトーの基本的な視座についての理解が徐々に深まっていくことになる。

## II 老年と仕事

老年が厭われる理由として第1に挙げられているのは、老年が人を公の活動から引き離すことである。心身の衰えによって、これまでの仕事から、取り分け、公職から引退せざるを得ないことは、確かにあるであろう。カトーは、これに対し、まず、たとえ体力は衰えても、精神によって果たすことのできる、老人に相応しい仕事があると主張し、老年にあって思慮と權威で国を守る大切な働きをした様々な人々に言及する。例えば、ポエニ戦争で、血気盛んに暴れまわるハンニバルに対し、遷延の策を用いて国を立て直したファビウス・マクシムス(4・10~12)であり、アッピア街道を整備した人物で、その老年には失明が加わるという困難な状況にあったにもかかわらず、元老院が軟弱な姿勢を示し、ピュッロス王との間に和平と条約締結

を進めようとした際に、元老院に出向いて極めて率直かつ強い言葉でこれを諫めたアッピウス・クラウディウス(6・16)である。こうした老人の働きを、船の甲板上を走り回って働いている若い船乗りに対し、船尾で舵を握って座っている操舵手(gouvernator)に喩え、舵取り役が、走り回らぬからといって働いていないのではなく、操船における極めて重要な役割を果たしているように、老人の「助言(consilio)・権威(auctoritas)・意見(sententia)」(6・17)によって国家の大きな事業が成し遂げられてきたことを主張する。他国の歴史に徴しても、強大な国が若い者の無思慮や経験不足で傾いたときに、その建て直しが老人によってなされた例は枚挙に暇がない。カトーは「無謀は若い盛りの、辛抱は老いゆく世代の持ち前」(6・20)と断じるのである。

中には、年老いると記憶力が衰え、公務に支障が生じると考える者もいる。しかし、(法廷や役所への)出頭の約束や貸借関係など、気になることや重要なことについては、人は年齢の如何によらず何でも覚えているものであり、年老いた法律家、神祇官や烏占官、哲学者などは、依然きわめて豊かな記憶を保持している。カトー自身、ピュータゴラス派の人々に倣ったやり方で、夜にその日の出来事すべてを思い出す方法で記憶力の鍛錬を怠らないという。このように、熱意と勤勉が持続すれば、老齢でも記憶力や知力が維持されることをカトーは指摘する(7・21)。それは高位の公職にある人のみならず、在野でひっそり暮らす人にも当てはまる。その例として、カトーはギリシアの詩人ソポクレスの場合を示す。ソポクレスは、高齢に至ってなお悲劇の制作に熱中し、家の管理を怠るよう見えただけで、息子たちが禁治産にしてもらおうとしたが、呼び出された法廷で、書き上げたばかりの『コロノスのオイディプス』を朗読し、この詩が呆け老人の作と見えるかと反問して無事放免を勝ち取った(7・22)。その他文学者としてはホメロスやヘーシオドス、修辞家としてはイソクラテースやゴルギアース、哲学者のピタゴラスやデーモクリトス、プラトーン、ゼーノンやクレアンテース、近年の人としてはストア派のディオゲネースなど、寿命の限り自らの仕事に努力し続ける人びとがいることを、カトーは述べるのである(7・23)。

こうした天賦の才に恵まれた人々は別にして、カ

トーは自分が日ごろ慣れ親しんでいるサビーニ地方の農民達の生き方や考え方に言及する。彼らは、高齢に至ってもなお、種まき、取り入れ、貯蔵などの大切な農作業において要の役割を果たしている。しかしまた、彼らは1年後の収穫を目指す仕事とは別に、自らには直接結果が返ってこない遙か将来のためにも、せっせと農事に励んでいるという。「次の世代に役立つようにと木を植える」とある作家が述べているように、彼らは不死なる神々のために、自分が先祖から受け継ぎ、後の世に送り渡すことを望まれた神々のために、木を植えるのだという(7・24-25)。また、老人が育てるのは農作物や木だけではない。カトーは、賢者は老人になって稟性豊かな青年を育てることに楽しみを見出し、青年たちも徳への専心へと導いてくれる老人の教訓を喜ぶことを述べて、若者に敬愛されながら彼らを教育する幸せな老人像を提示する(8・26)。公的な職務から隔たることへの老年期の不満に対し、若者を徳によって導くことが、結局は国家に対する奉仕として、最高の公的職務のひとつであることを、カトーは述べているのである。最後にカトーは、老年においても学び続け、向上し続けることができることに二人の若者の注意を引く。「毎日何かを学び加えつつ老いていく」と語ったソローンの言葉を引用し、自分も老年に至ってからギリシアの文学を学んでいることを述べ<sup>3)</sup>、更には老年に豎琴を学んだソークラテースにも言及している(8・26)。すでに多くを成し遂げながら、なおまたこうして新たな挑戦や活動にいそしむ老年は、公職は引退しても、決して仕事や活動の場の欠如を嘆く必要はなく、その姿は、若者にとっても人生そのものの師として、まさに敬愛の対象に相応しい存在たり得るであろう。

### Ⅲ 老年と体力

老年が厭われる2番目の理由としてカトーが取上げるのは、体力の衰えである。確かに、老年期に体力が衰えるのは事実である。体力の衰えに対処するに当たってカトーが主張するのは、「在るものを使う」という原則である(9・27)。つまり、何事も自分の持っている体力に応じて行なうということであり、無いときには求めないことである(9・33)。もとより、人生の各時期にはそれぞれに固有の性質—少年期のひ弱

さ、若者の覇気、壮年期の重厚さ、老年の円熟一が与えられていて、いずれもその時に取り入れなくてはならない自然の恵みであるという(10・33)。それが自然の掟であるならば、体力を頼みとする活動や生き方は、そもそも老年のものではない。カトーは、ある高名な運動家が、鍛錬に励む若者と自分の腕を見比べ、自分の盛時がもう過ぎ去ったことを知り、「自分の腕ははや死んでいる」と嘆いた話を引用し、そのような者の名声は、結局のところ、肺と腕の力によって得られたに過ぎぬと断言する。先ほどの老年と仕事の関係を論じた部分を敷衍すれば、老年は、体力を頼みとするような仕事ではなく、老年に相応しい精神的な仕事をもっぱら行なうようにすべしというのが、老年への第2の非難に対するカトーの回答になる。カトーは更に、市民たちに法律を教え示し、息を引き取る間際まで自らの学識を前進させようと努めて止まなかった一群の法律家達を示し、彼らは体力の衰えを嘆いたことはないと強調する(9・27)。つまり、カトーが言わんとするのは、体力はあくまでその人間の一部分であり、活動するための手段の一つに過ぎない。体力がすべてであるような活動は、青年期にはそれなりに価値があるにせよ、青年期を過ぎれば、いつまでも固執すべき類のものではない。むしろ法律家のように精神によって活動することへと軸足を移すべきである。カトーは、次いで弁論家を例に取り、彼らは知力と共に肺と体力を用いるので、ちょうど運動家と法律家の中間に位置すると述べている。弁論家の場合、老齢にいたって初めて輝き出る声の質があることを指摘し、場数や様々な体験を踏んだ上で、老年になって始めて可能となる身体の用い方もあることに言及する。とはいえ、老齢の弁論家にとって何よりも相応しいのは静かで気負いのない話し振りであり、雄弁な老人の整然とした穏やかな演説はそれだけで傾聴を勝ち取るものであると述べている(9・28)。これこそ、カトーの言う、老年における円熟の優れた例に他ならない。

しかしまた、老年期の円熟には、別の活躍の機会もある。弁論家は、たとえ自分では演説ができなくても、若者に教えることができる。更に、弁論家に限らず、若者の熱意に取り囲まれた老年ほど喜ばしいものはない(9・28)。ここまでは、老年が疎まれる第一の理由に関しても同様なことが述べられていた。ここでカトーは、体力について更に言葉を付け加える。そ

うした教育する者としての喜びを真に享受するには、「青年を教え諭し、義務に属するあらゆる奉仕へと訓育してやれるだけの体力を老年まで温存しておくことが必要である」(9・29)と。しかしまた、多くの先人の例が示すように、高潔な若者に囲まれて教養を授ける師は、体力がいかに衰えていても、不幸せではない、ともいう。

体力に関しては、上記のように、「在るものを使う」が原則であるが、カトーはローマの同盟者であるマシニッサ王が、「徒歩で行くときは決して馬に乗らず、馬で行くときには馬から下りることはない。どんなに雨が降ろうが冷え込もうが、決して帽子をかぶらず、王としての義務や責務を余すところなく果たしていた事例を引き、このように鍛錬と摂生に努めれば、老いてなお往時の頑健さの何がしかを保つことができる、とする(10・34)。つまり、老年になお若い頃と同じ体力を求めたり、若者と同じ活動を望んだりするのではなく、若いときにはできない活動や活動の仕方を、つまりは老年としての固有の輝き方を追求すべきであるが、それでもなお、その輝きを一層増したり保ったりできるよう、心身を鍛え続けることが求められる。

老年には立ち向かわねばならない。その欠点はたゆまず補わなければならない。病に対するごとく、老いと戦わなければならない。健康に配慮すべきである。ほどよい運動を行い、飲食は体力を押しつぶすほどではなく、体力が回復されるだけを摂るべきである。また、肉体だけでなく、精神(mens)と心(animus)をいっそういたわらなければならない。このふたつもまた、ランプに油を継ぎ足すようにしてやらないと、老いと共に消えていくからだ。肉体は鍛錬して疲れが昂じると重くなるが、心は鍛えるほどに軽くなるのだ(11・36)。

カトーにとって、体力の面からも望ましい老年の姿を最もよく具現している人物は、先にも触れたアッピウスである。カトーの説明によれば、アッピウスは、生涯、大家族と多くの庇護民を統率した。家族に対しては絶対命令権を保持し、奴隷たちは恐れ、子ども達は敬い、そして皆が親愛していた。彼の家では先祖の威風と規律がしっかりと生きていた。「自分の身を守り、自分の権利を保ち、誰にも隷属せず、息を引き取

るまで一族を統べてこそ老年は尊敬に値する」(11・38)。そのようなアッピウスにおいて重要であるのは、「老いて盲目であったにもかかわらず、あたかも弓のごとく張り詰めた心を保ち、だらしなく老年に届することはなかった」(11・37)という点であるとする。

最後にカトーは自分自身のことを語る。自分は今も、歴史書の執筆、古代についての調査、かつて行なった弁論の仕上げ、記憶力の日々の鍛錬を行なっているが、そうした努力のためには取り立てて体力を必要とするわけではない。友人のために法廷にも立てば、元老院にも頻繁に出かけ、慎重に考え抜いた提言をする。結局のところ、肉体の力でなく、心の力でそれを守り通す(11・38)。

老年には、若いときのような体力は確かに望めない。その代わり、老年の知恵や蓄積された経験や精神の力でこなす仕事をする。体力は、あくまで「在るものを使う」。しかし、老いて衰えるに任す訳ではない。心身の適度な鍛錬の継続が必要である。このようにして刻苦精励の中に生きるものには、いつ老年が忍び寄るかも知れぬ。「こうして人生は知らぬ間に少しずつ老いていく。突如崩れるのではなく、長い時間をかけて消え去っていくのである」(11・38)。

#### IV 老年と喜び

老年に対する3番目の非難は、老年には快樂がないとする考え方による。ここでカトーは、青年が容易に傾き溺れてしまう二つの感覚的快樂に対し、老年がいかに対するべきかを論じた上で、老年にとってより相応しい快樂について論じる。まず、カトーは、老年期に性的快樂が失われることをあたかも人生の喜びがすべて無くなったかのように嘆く人々の声を一蹴し、逆に、人を精神的活動や理性的判断から遠ざけ、様々な誤りや悪行へ誘う要因が遠ざかったことを喜んだ古今の賢人の言葉を引用した上で、自分の考えを明らかにする。「理性と知恵で快樂を退けることができぬ以上、してはならぬことが好きにならぬようにしてくれる老年というものにおおいに感謝しなければならない。(中略)快樂は熟慮を妨げ、理性にそむき、いわば精神の眼を曇らせ、徳とは何の関わりもない」(12・42)。

カトーが取上げるもうひとつの快樂は、宴会や贅沢な山海の珍味山盛りの食事など、飲食の快樂である。

カトーは自分自身を例に挙げ、老年も宴会を嫌うわけではないが、年とともに万事が穏やかになっていく。宴会の喜びも、飲み食いの楽しみから、友との交わりや会話を中心とするものへと移っていく。友人同士が寝椅子に臥して宴を楽しむことを、ローマ人が古くから「convivium (生をともにすること)」と呼んできたのは、ギリシア人がおなじことを、「conpotatio (共に飲み食いすること、宴会)」あるいは「concenatio (会食)」と呼んだのよりもはるかに事の本質に通じている、と論じている(13・45)。

カトーは「老年にとって、いわば肉欲や野望や争いや敵意やあらゆる欲望への服役期間が満了して、心が自足している、いわゆる心が自分自身とともに生きるというのは何と価値があることか」(14・49)と述べている。つまり、青年期や壮年期の強い欲望、とりわけ快樂を求める欲望から解放され、自分が真に価値ありと考える活動に専心し、真に自分らしく生きられることは大きな幸福である。「まことに研究や学問というような糧のようなものがいくらかでもあれば、暇のある老年ほど喜ばしいものはない」(14・49)。こうしてカトーは、老年にあって自らの研究を嬉々として追求した人々やその携わった研究の内容を示し、「この快樂は思慮深くきちんと教育を受けた人にあっては年齢とともに育っていく」(14・50)と言う。もちろん、こうした例が、当時にあって特別に恵まれた人々にのみ可能であったことは確かである。そのためか、ここでまた、カトーはより多くの人々にとって可能な農事の楽しみに触れる。農事から得られる喜びは、国家の要職や学問教養とは縁のない田舎の農夫も日々享受しているものである。しかし、キケローに言わせると、農事は、広く老年の楽しみとして、また王侯や賢者にさえ相応しい楽しみとして、まことに申し分のないものである。曰く、「それは信じられないくらい私には楽しいもので、いかなる老年によっても妨げられぬし、賢者の生き方に極めて近いと私には思われる」(15・51)。その理由として、カトーは次のようなことを挙げている。まず、農業は大地と取引することであるが、大地は、たいていは気前よく受け取ったもの(蒔いた種や植えた苗)以上のものを返してくれる。また、そうした収穫の喜びだけでなく、大地が植物を育てる力や大地の本性そのものも、観察する者に大きな喜びを与えてくれる。特に素晴らしいのは葡萄作りであり、

撞木挿し、挿し木、根分け、取り木などの工夫の喜び、葡萄畑の美しさ、農作業の楽しさなど、それは多くの楽しみや喜びに満ちている。「牧場の新緑や木々の並び、葡萄園やオリーブの林の美観については何をくどくどのべることがあろうか。(中略) 善く耕された農地以上に用いて実り多く、眺めて端然たるものはない。それを味わい楽しむのに、老年は妨げにならぬどころか、そこへ誘いおびき寄せなのだ」(16・57)。このように、農業の喜びはすべての老年に対し開けている。しかしまた、古来田舎に住んで農業に従事していた元老が、国難に際し、元老院により独裁官 (dictator) 等に出選されて呼び出され、ローマへ出向いて活躍した例は数え切れない。農業を日々の楽しみとして暮らしながらも、いざというときに頼られる老年ほど喜ばしいものはない。若いときの職務への精励や国家の利益への尽力・活躍のゆえに、老年になってその考えや意見が求められ、尊重されることを“auctoritas” (「影響力」ないし「権威」) というが、「まことに老年の誉れの最たるものは影響力 (auctoritas) なのだ」とカトーは述べている (17・60)。更に、そのような老年期について、「(それは) 青年期の基礎の上に打ち立てられた老年だということだ。(中略) 白髪も皺もにわかには権威 (auctoritas) に掴みかかることはできない。まっとうに生きた前半生は、最後にいたって権威という果実を摘むのだ」(18・62) と述べている。

つまり、老年期を充実して過ごすには、青年期における過ごし方や準備が大切である。青年期には生命力がピークに達し、動物一般に共通する欲望—性的欲望、飲食への欲望、闘争的欲望などに衝き動かされて行動しがちである。また、そうした欲望充足のために多くの時間や活力を費やし、しかも様々な失敗を犯しがちである。しかし、老年に達してからもなお深め行くことの可能な喜びや楽しみをこそ追求すべきであり、老年期に真の喜びを達成し実現することを心に留めて、若いときから徳に満ちた生き方をすべきである、というのがカトーの説くところである。

## V 老年と死の接近

老年が厭われる理由として最後に挙げられるのが、死の接近である。確かに、時代を問わず、多くの人にとって自分の死は不安で恐ろしいことであろう。これ

に対しカトーは言う、「死は確かに老年から遠く離れたものではありえない。(しかし) かくも長い人生の間に死を軽んじるべきことを悟らなかったとすれば、ああ、何と哀れな老人よ」(19・66)。つまり、老年に達するまでの長い人生を歩みながら、その過程で自然の法則や掟を一つまりは如何に生きるべきかを一学んでこなかったとすれば、そのような人生全体が充実から程遠いのではないか。ソークラテースは哲学を「死の練習」と言ったが、カトーも、自然の掟に従い、人生のそれぞれの時期になすべきことを成し遂げ、人生の意味や意義を真に理解するに至った老年は、死を恐れず、むしろ待望しさえすると考えている。こうした概観をもとに、老年と死の関係についてのカトーの考え方を更に詳細に検討していくことにする。

まず、我々の魂は死後どうなるのであろうか。今も昔も多くの人びとが心を悩ませる問題である。カトーは、可能性は二つであり、いずれの場合も心配するに及ばないと主張する。即ち、もし、死によって魂がすっかり消滅するのなら、死後のことは懸念するに及ばないことになる。死に際しては何か死の感覚のようなものもあるかもしれないが、老人にとっては短いもの、つまり瞬時に済んでしまうのであるから、過度に恐れる必要はない (20・74)。逆に、死後、魂にとって永遠の生が待っているのなら、死はより善き世界への旅立ちであり、待望すべきものでさえある (23・83-84)。死後の魂の在り方はこのいずれかであり、それ以外の道は見いだされ得ないとカトーは考える。

また、老年が死に近いということは、取りも直さず、老人の方が青年より余命が短いということであるが、これとて必ずしも真ではない。というのも、青年は病気に罹りやすく、また一旦病を得ると重篤になりやすく、そうなる治癒も甚だ困難である。それだからこそ、老年にまで達する人間の数が少ないのである。青年は長生きすることを望むが、老年はすでにそれを達成しているのであり、それゆえ青年よりも老人の方がよりよい状態にあるとも言える (19・67-68) と、カトーは主張する。

しかしまた、より大きな視野から見ると、残りの人生が長いか短いかなどは僅かな程度の差に過ぎず、人間の本性中に真に長いものや永続的なものなどあり得ない。後々まで残り、多少とも永続的と言えるのは、「ただ徳と善き行いによって達成したことだけである」

(19・69)、とカトーは断ずるのである。それでも、舞台の役者が自分の登場する場面をよく演じたなら、最後の幕まで出続ける必要がないのと同じく、「束の間の人生も、善く生き気高く生きるためには十分長い」(19・70)のである。そうして老年に達し、やがては最期を迎えることになるが、それは極めて自然なことであり、自然であるがゆえに、それは善きことの中に含まれることになる(19・70-71)。

青年が死ぬのはさかんな炎が多量の水で鎮められるようなものであり、他方、老人が死ぬのは、燃え尽きた火が何の力を加えずともひとりで消えていくようなもの、と思われるのだ。果物でも、未熟だと力づくで木から挽ぎはなされるが、よく熟れていれば自ら落ちるように、命もまた、青年からは力づくで奪われ、老人からは成熟の結果として取り去られるのだ。この成熟ということこそわたしにはこよなく喜ばしいので、死に近づけば近づくほど、いわば陸地を認めて、長い航海の果てについに港に入ろうとするかのように思われるのだ(19・71)。

このように、死は人生にとって極めて自然なものであり、成熟のあとの完成を意味するものとしてこれを恐れず、むしろ、いつ死が到来することになってもよいよう心構えができていなくてはならない。

先に、死後の魂の行方について、カトーが二つの可能性を考えていたことを見た。カトーは最後に、この問題に対する自らの立場を明らかにし、そこから老年と人生についての議論に一定の結論をつけるのである。カトーによれば、魂は死とともに消滅するのではなく、肉体を離れ、本来の住処である天上の世界に戻り、そこで永遠の生を享受することになる。これは、カトー自身も述べているように、ピュータゴラス、ソクラテースおよびプラトーンを継承する立場である(21・78)。カトーは、今は亡き大スキューピオーヤガーイウス・ラエリウスが、「私の考えでは、ただそのみが生と見なせる生を、いまは生きているのだ」(21・77)と述べ、死して後、「魂たちの寄り集うかの神聖な集まり」(23・84)において生きることこそが真の生であると考えるのである。そこへの旅立ちは、苦痛であるどころか、むしろ極めて喜ばしい出来事に他ならない。逆に、この世界で肉体と共にある限り、「魂

は(中略)神の本性とは逆である地上に、沈められている」(21・77)のであり、「われわれは肉体というこの形骸の中に閉じこめられている限り、自然の掟が定めた務めと重い仕事を果たさねばならない」(21・77)のである。

では何ゆえに、魂は地上の世界に苦勞して生きねばならないのか。カトーは、神々が「地上を世話するものや、天界の秩序を観察して、ゆるぎなき生き方を持ったその秩序を模倣するものを存在させようとした」(21・77)からであるとその理由を述べている。即ち、人間の義務として、荒々しく、混沌としたこの大地を整え、世話をし、そして支配する仕事、例えば、先に触れた農業はひとつの典型であろうし、更には都市を造り、文化を興し、人間に相応しい生活を整えることなどがあり、また、天界の秩序を地上に反映、英知を集めて優れた国家を造り、これを維持発展させていくことを神が求めている、とするのである。

キケローは『老年について』に先立つ10年前の著作『国家について(De Re Publica)』の中で、国家の安寧・発展に尽くすことこそが、神が嘉する人間の地上での最も尊い職務であることや、国家の指導者ないし保護者として特別な貢献を果たした者には天界に特別な場所が永遠の住処として定められていることなどを論じている<sup>4)</sup>。『老年について』では、そうした特別な人間には言及されていないが、カトーをして、国家に貢献し後代にわたる「誉れ(gloria)」を得るために、自分も含めて多くの人間が、現世で敢えて辛く苦しい役割や仕事を引き受けてきた(23・82)と述べさせている。更には、多くの優れた政治家や軍人が命を賭して国家を守ったことや、名もなき若者の軍団が、生きて帰れるかも分からぬ戦地に、幾度も喜んで出陣して行ったことを述べて、国家の防衛や発展のためには、死をも恐れず行動すべきだと述べている(20・75)。

ただし、その際の国家とは、あくまでも「みんなのもの」ないし「公共のもの」を意味する“res publica”(resは「もの」、publicaは英語のpublicに当たる形容詞である)としての国家であって、決して特定の君主や党派が独占的に支配するものではない。古代ローマでは、何代にも互ってローマを建国してきた先人や祖父たちを自分たちに比べて「より大いなる人々」という意味でmaiori(形容詞magnusの

比較級 *maior* が名詞化した主格複数) と呼び (それゆえ、彼らに比し、自分たちは *minori* になる)、その「より大なる人々」が歴史の全体でもってつくり上げてきた「道」ないし「やりかた」(*mos*) を「より大なるものの道 (*mos maiorum*)」<sup>5)</sup> と呼ぶ。それを体現している国家において、そこに個人として幾許かの貢献を果たし、人生を終えるのが、ローマ人としての幸福な人生であり、老いの姿なのであった。

## VI 結び

「老い」に関する先駆的な総合研究 (『老い (*La Vieillesse*)』) を行なったポーボワールは、歴史的研究の章で、キケローの『老年について』に対し相当辛辣な評価を下している。即ち、元老院議員であったキケローが、久しい以前からぐらついていた元老院の権威を再び強化する目的で、老年の擁護を構想した<sup>6)</sup>、というのである。更に、『『自然なものはすべて善いものとみなされなければならぬ』。ストア主義から吹き込まれたこの結論に到達するのであったら、彼はこの論文を書かなくてもよかったであろう。なぜなら、老いは死と同じほど自然なのであるから』<sup>7)</sup> と、キケローの老年論の意義まで否定するに近いことを述べている。

これに対し、ジョルジュ・ミノワは、『老いの歴史 (*Histoire de la Vieillesse en Occident*)』において、もう少し好意的な評価を示している。「老人に対してきわめて厳しい目を向けたローマ文明から、多くの点でこれほど卓越した、驚くべき老いの弁明書が生まれたのは、不思議でさえある。この作品は、文学に占める位置においても、文体と論法の質の高さにおいても、高齢者の歴史の中に、重要な一步を記している」<sup>8)</sup> と。キケローの『老年について』を、老年を論じた「作品」としては高く評価しているといえよう。とはいえ、キケローの議論が階級的制約を受けていたと批判する点では、ポーボワールとさほど変わらない。曰く、「彼がここで示した老いは、カトーという伝説的な人物が述べる理想の老いである。それは、教養があり、健康に恵まれ、有名で尊敬されていた金持ちの地主の老境で、そのすべての行動が高邁な哲学から着想を得ていた」。「彼の論考は、他の多くの作品と同じく、プラトンの考えの延長である。それは生身の老人たちがうめく洞窟を描いたものではなく、思想の世界に依拠して

いるのである」<sup>9)</sup>。

ポーボワールとミノワに共通するのは、老いについての歴史的研究の中でキケローを取り上げたことである。そうすると、キケローの作品が当時の老いの姿、取り分け民衆の老いの姿をほとんど描写していないこと一つまり、恵まれた階層に属し、老年に達してからなおも活躍をし得た人々の老いばかりが大きく取上げられていること一が、大きな欠点となる。ミノワは更に、このキケローの作品が哲学的な作品であることまでも、批判的に受け止めている。しかし、「はじめに」でも触れたように、この作品があくまでも老いを哲学したものであることは、キケロー本人が認めているところであり、哲学によって老いの自然なあり方ないしは自然の法則から見た老いのあるべき姿を問うたものに他ならない。老いにおける様々な心身の機能の低下や社会的役割の縮小をそのまま嘆いている限り、老いに救いはない。老いを正面から受け止め、その意義を覚知するためには、老いを見る目の転換が必要なのであり、その手助けをしようとしたのがキケローのこの作品に他ならない。

これに対し、古典文学の研究者ロックウッドは、キケローの哲学的論考全般に三重の目的があったと考えている。すなわち、青少年を教育し鼓舞することであり、市民たちが彼らの公的義務を遂行するのを督励することであり、更に年老いて苦しんでいる人たちに慰安と慰めを与えることである<sup>10)</sup>、と。筆者には、ポーボワールやミノワよりも、ロックウッドの評価の方が、キケローの作品の真意をはるかによく捉えているように思われる。キケローの作品が、老年には老年に相応しい役割や生き方があると論じた点、あるいは死後に永遠の生が待っていると論じた点は、まさに老年への福音に他ならない。と同時に、より重要なのは、老年こそが人生の完成期であり、人生の最終的な価値を決めるものであるから、老年を目標に、青年期から勇気をもって徳に適った生き方をするよう激励した点である。取り分け、「みんなのもの」である国家への奉仕こそ重要であり、老年になっても、若い頃からの活躍や実績や経験によって影響力を保ち続け、いざというときに周囲から期待されることこそ、真に素晴らしい老年であると論じ、若者たちが目指すべき理想の生き方を示した点である。こうした思想がキケローの美しいラテン語文体によって示される時、必ずや、前途



有望な若者たちを鼓舞し、強い形成的影響力を及ぼしたことであろう。キケローの老年論が、自由教育(liberal education)の歴史の中で、重要な位置を占め続けた所以である。

With Introduction And Notes, Ginn & Company, Publishers, Boston USA, 1903, Introduction p.viii

## 注

- 1) テキスト原典は Loeb Classical Library, Cicero X X 所収の Cato Maior de Senectute 及び On Old Age De Senectute, Marcus Tullius Cicero, Latin text with notes and vocabulary, Charles E. Bennett, Bolchazy-Carducci Publishers Inc. Illinois, USA を用い、翻訳は『老年について』キケロー著、中務哲郎訳、岩波文庫、2004年を参考にした。訳文については、中務訳をそのまま用いさせてもらったところが多いが、解釈が異なるところは改めた。  
以下同書に言及する場合は、“De Senectute”と略記した。  
なお、同書から引用する場合は、古典文学研究の慣例に従い、(3・5)のように章番号を先に節番号を後にして(この場合は第3章第5節である)本文中に示した。
- 2) 執筆当時、キケローは63歳であった。
- 3) カトーは監察官のとき、ギリシアの文化移入による風紀の弛緩に反感を持ち、ギリシアの哲学者と修辭学者のローマ居留を禁止した。
- 4) De Republica, 6・13, Loeb Classical Library, CiceroXVI.
- 5) mos maiorum については筆者のラテン語の師である北白川学園理事長山下太郎先生に御教示を頂いた。
- 6) 『老い(上)』137頁、シモーヌ・ド・ボーヴォワール、朝吹三吉訳、人文書院、1972年。
- 7) 同上書、139頁。
- 8) 『老いの歴史—古代からルネサンスまで』141頁、ジョルジュ・ミノワ、大野朗子・菅原恵美子訳、筑摩書房、1996年。
- 9) 同上書、149頁。
- 10) Frank Ernest Rockwood, “M. TVLLI CICERONIS TVSCVLANARVM DISPVTATIONVM Liber Primvs ET SOMNIVM SCIPIONIS” Edited,

